

# ペリー来航の意味について

塹 江 清 志・早 川 清 一

本論文の目的は、1853年のペリー来航の意味について考察することである。ペリー来航の目的は、世界経営者層の太平洋制圧作戦のための日本植民地化であると結論された。

キーワード：米合衆国，インディアン，南北戦争，ペリー

## 1. 本論文の目的

本論文の目的は、1853年のペリー来航事件の意味について考察することである。

## 2. 米合衆国建国後の世界の歴史

### 2.1 米合衆国建国の意味について

前報（第2報）で述べたように、米合衆国建国の意味は世界経営者が世界経営を遂行するに当たっての望ましい「世界機構・構造」（「新世界機構・構造」）を構築するための「実行機関・組織」としての米合衆国の建国であった。このことは、その後の世界の歴史のあり方を分析することによって明らかになるのである。

### 2.2 米合衆国建国後の世界の歴史

米合衆国を用いての「新世界機構・構造」の構築のためのこれまでの一連の歴史的、世界的事件が、米合衆国建国以後の世界の歴史なのである。Nathan Roshchildによって、民主党オーガスト・ベルモントが米合衆国に派遣され、1837年に米合衆国においてユダヤ人フリーメーソン組織「ブナイ・ブリス」が創設し、以後、この組織が主体となって、米合衆国それ自体のあり方が新世界機構・構造のあり方そのものであるように建国後の作業を指導したのである。その後、マクロな次元では、第1次世界大戦・ロシア革命・第2次世界大戦・冷戦構造作戦・朝鮮戦争・ベトナム戦争・ソ連解体・湾岸戦争・イラク戦争という一連の作業によって新世界機構・構造の構築作業が遂行されて来たのである。今日、この作業は完了寸前である。あと残された課題は、北朝鮮・中国・イラン・インド・ミャンマーなどの国の再構築作業であるようにみえる。

世界経営者層による米合衆国の支配・経営・運営・管理機構の構築作業とその結果としての米合衆国の機構・構造については、改めて別報で考察するつもりであるが、経営者層の一人としてのロスチャイルドの作業を簡単に要約すると、以下のようになる。

アムシェル・マイヤー（メイヤー）・ロスチャイルド → モーゼス・ゴールドシュミットの子孫のマイヤー・アムシェル・ロスチャイルド（1744-1812）の長男アムシェル・マイヤーは、渡米し、クーン・ロエブ商会の重役となり、上述のような作業を指揮し、J.D.Rochefeller財閥を育

成したのである。また、三男ネイサン（ナターン）（ロスチャイルド二世）は、J.P.Morgan財閥を育成し、五男ジェームズ・ヤーコブ（ヤコブ）・マイヤー（ロスチャイルド三世）は、渡米した後、再度仏に帰国した。モーゼス・ゴールドシュミットの子孫ジェームズ・ゴールドシュミットは、20Cの世界で黒幕の一人として活躍した。

### 3. 新世界機構・構造構築作業

#### 3.1 建国後の対内作業

米合衆国建国後の緊急の課題は、物理的次元での2つの対内・国内作業であった。一つは、米合衆国の領土確定であり、それにはインディアンを殲滅し、彼らから領土を奪取し、領土を拡大することであった。もう一つは国内の統一であり、この作業達成のためには南北戦争を必要とした。

##### 3.1.1 インディアン殲滅作業

###### 3.1.1.1 インディアン殲滅にみる白人の残虐さ

西欧人の精神構造から由来する「対象絶滅」の心理（「皆殺し」の心理）に白人優越主義・アジア人や黒人を蔑視するという人種的偏見の心理が付加されるとき、原住民に対する極めて残虐な行為を行うことになるが、西欧諸国の世界侵略において西欧人は、この残虐行為を、コロンブスの西インド諸島侵略以来発揮してきた。アングロ・サクソンを代表とする白人達は、この残虐行為を米大陸においてもアメリカ・インディアンを対象に発揮し、米合衆国内のインディアンを殲滅し、今日に至ったのである。

先住民族であるインディアンを駆逐・虐殺し、土地・資源・農産物を略奪した歴史が米建国の歴史であったとも言えるのである。コロンブスのときもそうであったが、先住民達は新しい訪問者である西欧人を親愛の念をもって心から歓待したが、それに対して、西欧人は虐殺でもって報いたのである。

###### 3.1.1.2 米大陸移住者に対するインディアンの献身的支援への返礼

1620年のメイフラワー号の移住者達に、ワナパナグ国首長マサソイトは、ジャガイモ・カボチャなどの栽培方法、そして、漁業の方法や魚・海草から肥料作りを教えたという。生存者達の感謝祭にはインディアンも参加して、3日間祝宴を張ったという。移住者達は、慢性的食糧不足から、インディアンから強奪・窃盗・脅迫などの手段で食糧を獲得し、それに対して、インディアンの指導者・ポワターンは「貴方は、愛によって我々から得られるものをどうしてかづくで取ろうとするのか」と言った。白人の指導者・ジョン・スミスは「我々がむしろインディアンの襲撃を予期した時に彼らがトウモロコシを我々に運んで来てくれたのは、全く神の恩寵とう以外はない」と告白した。

1969年春、米週刊誌「News Week」に以下のような記事があったという。「今日、米国の農産物の50%以上は、コロンブス以前にインディアンによって使われた作物——数種の豆・チョコレート・トウモロコシ・綿・ピーナッツ・ジャガイモ・カボチャ・トマト等／病気にはインディアンから付与されたアレニカ・カステラ・コカイン・イペカク・ウィンターグリーン油・ワセリン・キニーネ・はしばみなどを／植物学者は、この400年間インディアンが使ったことのない薬草を見いだすことが不可能と言っている。これが彼らが我々に付与したものである。ではそのお

返しに我々は何を彼らに与えたか。高い幼児死亡率・短い平均寿命・施し物への依存・誇りの喪失・数々の病気・時には80%以上にもものぼる失業率／生き残りの60万人のアメリカ・インディアンは米社会の保健・教育・経済のはしごの最低の段にやっとしがみついてぶらさがっている」

米人のインディアンへの返礼は、土地略奪・大量虐殺・人権奪取であった。彼らに、他国に対して（中国・ミャンマーなど）人権外交を実施する資格はない。

藤田は、「米・インディアン悲史」の中で「インディアンが土地から力によって排除されたのは明白な歴史的事実／辛くもゼノサイドをまぬがれた敗者／白人は勝者／詐欺と欺瞞による米建国の意義が正面から問われている／土地の占有についての条約・協約は、300以上／その殆ど全てが白人の側から一方的に破棄された。このことは、全く否定の余地のない歴史的事実／我々はこので、むしろ、この事実の証拠湮滅を殆ど企てなかった白人達の天真爛漫さを称えるべきであろうか」

インディアンは米建国の恩人であった。恩を仇で返したのが清教徒をはじめとする白人植民者であった。彼らは、新大陸での成功は、インディアンのお陰とはせず、キリスト教の神のお陰であり、インディアンは開拓邪魔者であったと言う。十字軍以来キリスト教徒達は自己中心的な白人優越主義を変更しない。

### 3.1.1.3 土地奪取

インディアンから煙草の栽培を習い、移住者達は自ら栽培するようになり、規模を拡大するためにインディアンの畑を強奪し、バージニアの煙草園を獲得し、インディアンを土地から駆逐した。移住者達にとって、土地は莫大な利益を生む、有利な不動産投機の対象であった。一方、インディアンは土地に対する関心がなく、所有権という観念がなかった。

白人達の中でも後の米人となった英人が特に横暴であった。仏人は毛皮に関心を示し、インディアンを猟師として有効利用した。スペイン人は貴金属と布教に関心を示した。英人は土地の略奪に専念した。土地を略奪されることはインディアンにとっても死を意味する。インディアンとしても生死を賭けて戦わざるを得ない。インディアン社会は元来アルコール飲料無しであった。ウィスキー・ラム酒・ワインなど（インディアンは「火の水」と称した）をインディアンの間に流行させ、土地を二束三文で略奪した。マンハッタンの土地をビー玉一つと交換したという話もある。

### 3.1.1.4 インディアン殲滅戦

#### 独立戦争前

17C前半よりインディアンの土地略奪戦が開始された。1622年に森を追われた部族連合体の指導者オペチャンカヌラによる一斉蜂起による白人経営の農園襲撃事件でインディアンは敗北した。1636年マサチューセッツ知事ベインはアルゴンキアン系ペコート族を攻撃、ペコート族は、モヒカン族・ナラガンセット族に対して共同作戦を提案したが失敗した。1637年5月マサチューセッツ当局はペコート族を殺戮（史上最大のインディアン大虐殺と言われている）（モヒカン・ナラガンセット族は白人の側に立った）。白人との対立状況においてワムパナグ族の酋長キング・フィリップは、他の3部族ニブマック・サコネット・ナラガンセットに対して団結を説得したが失敗し、サコネット族の女酋長セイチュム・アワションクスの裏切りの密告もあった。その後、フィリップのワムパナグ族は白人との間でゲリラ戦を開始した。ニブマック族・ナラガンセット族も戦争に突入した。1675年12月19日にナラガンセット族は本拠地を攻撃され、消滅した。1676年7

月20日にフィリップ討伐戦が開始され、8月12日フィリップは戦死し、ここにアルゴンキアン系インディアンは殲滅された。

アルゴンキアン系インディアンの宿敵であったイロコワ系インディアンは16C後半連邦（モホーク・オネイダ・オノンダガ・カエガ・セネカ・タスカローラ族）を形成していたが、アルゴンキアン系インディアンの殲滅に続いて殲滅された。ワシントンは、独立戦争時にイロコワ・インディアンに中立を要請した。彼らはそれに応えてオネイダとタスカローラは中立を守り、他の4部族は英国の味方をした。

### 独立戦争後

ワシントンは、インディアンを米市民とはみなさず、インディアンの権利を全面的に否定した。領土的野心から西部地区の獲得と邪魔になるインディアンの殲滅を企図した。

アーサー・セント・クレア知事は、インディアンの指導者達を騙し土地を収奪し、戦争に持ち込んだ。ワシントンは、イロコワ連邦のインディアンを利用しマイアミ連合（マイアミ・ショーニー・デラウェア・モヒカン部族の連合）の切り崩しを企図した。

1792年3月14日にワシントンは、インディアンの代表者達をフィラデルフィア会議に招集、有名な「二枚舌」演説を挙げて行った。「私は、確固とした平和が、米合衆国とイロコワ五国連合との間だけでなく、他の全てのインディアン部族との間にも確立されることを心から望んでいる。そして、その平和は、人道と正義に基づかねばならない。米合衆国が不当にその土地を奪ったとして、一部のインディアン達が我々に敵意を抱いているが、それは誤解に基づく不幸な事態である。それらの土地は合法的な、土地売買の契約によって正当に米政府の所有になったのである。」

よくもぬけぬけと言えたものである。「合法的」とは「策謀」と「武力」による「強奪」という意味である。この会議でインディアン達は激しく反抗した。

ワシントンは、1794年8月末の「落木の戦い」でフォート・マイアミ付近のインディアンに決定的敗北を与え、1795年6月16日－8月10日の休戦会議で土地を略奪した。ワシントンは、インディアン虐殺・追放の父であり、白人の論理を極限迄押し進めた人物である。

三代大統領・ジェファーソンはインディアンに借金をさせ土地を収奪した。七代大統領・アンドリュー・ジャクソンは、イロコワ系クリーク族の反乱に際してチェロキー族をして、クリーク族を攻撃させた。戦後はチェロキー族を強制収容所に入れ、テネシーからオクラホマへの1,300kmの移住の旅に追いやったのである。

岸田によれば、米人・米合衆国が二言目には「正義・正義」（世界の警察官・民主主義の防衛・自由社会の防衛・人道主義的立場などをスローガンとして掲げる）と大上段に振りかざすのは、深層に抑圧したインディアン虐殺から来る罪悪感の補償としてであるという。

もちろんそれもあるかも知れないが、前述したように、米合衆国の使命は、換言すれば、建国の目的は、新世界機構・構造の構築にある。従って、それに合致しない在り方・存在様式（政治・経済・軍事・教育などにおける在り方）の世界の他の国・民族・組織に対して、「言いがかり」（軍事政権・独裁政権・独裁国家・全体主義国家・ファシスト国家などの言葉でもって非難）を付け、建国以来のフリーメーソンのスローガン（「自由・平等・博愛」から「民主化・改革・開放」を経て今日「テロ撲滅・核拡散防止・大量破壊兵器廃止・過激派」に変化）をかざして、いわば、「因縁」を付けて、リストラするのである。米合衆国建国以後の歴史的事実の証明するところである。

対英独立戦争後の領土拡張は、インディアンの土地を奪取すること以外にも、1803年に仏から

米大陸中央部買収／1845年にテキサスをメキシコから独立さす／1848年の対メキシコ戦で太平洋岸の土地を領有し拡大した。

### 3.1.2 南北戦争

#### 3.1.2.1 奴隷問題

##### 奴隷貿易

南北戦争の原因がリンカーンによる人道主義的立場からの奴隷解放であるというのは、いわゆる「リンカーン神話」である。(志貴<sup>3)</sup>によれば、「いくら感激ぐせのある物語作家でも、うんざりするほどほめちぎった言葉で、リンカーン像をでっちあげたりはしないであろう。」「事実、生い立ちからここまでリンカーンの半生を追ってきても、偉人伝に書いてあるような道徳の教科書向きの人間像はうかんでこない。」「正直なところ、辺境の丸太小屋から、スプリングフィールドの町の名士に出世した、政治好きの田舎弁護士がいるだけである。」「そして、道徳の教科書向きの人間が、新しい時代を切り開いたことなど、一度もない。そもそもリンカーン自身が、自分は、ごく普通の人間だと考えていたのである。)」しかし、黒人奴隷問題は、米合衆国の歴史に触れるとき看過出来ない問題ではある。大航海時代以来の西欧諸国による世界侵略による世界植民地化の過程で実施された植民地の原住民(主に黒人など)を奴隷として売買した延長上で米合衆国へのアフリカからの黒人奴隷が移入され、米合衆国の産業を支える基幹労働力となったのである。

奴隷貿易は、スペイン人・ポルトガル人によって着手され(第1報で述べたように、すでにコロンブスの第1回目の航海(1492年)において発生)、その後欧米諸国が参加したが、16Cでは、90万人、17Cでは、275万人、18Cでは、700万人、19Cでは、400万人のアフリカの黒人が新大陸に奴隷として連行されたという。1619年に、米合衆国に「黒い積み荷」と呼ばれた黒人奴隷が入荷したのである。

##### 奴隷観

人類社会は、狩猟・採取→牧畜→農業と変遷してきたが、牧畜を抜かして、狩猟・採取社会からいきなり農業社会に移行し、世界でも珍しい牧畜の経験のない日本人は、家畜観や奴隷観が欧米人のそれとは異なる。奴隷については、日本人あるいは、後代の人間はすぐ虐待という言葉を連想するが、それは偏見であり、「アंकル・トムの小屋」は例外である。イザヤ・ベンダサン<sup>4)</sup>は、以下のように述べている。奴隷は日頃非常に大切にされ、祭日などは奴隷が上座に据えられ、主人が食事の給仕をした。奴隷とは、貴重な家畜であり、高級家畜であった。家畜の世話をし、食物を与えた後で自分の食事をするのと同じである。(家畜を飼っている日本の農家と同じ。)家畜は繁殖させてその子供を売るための利殖の元本であった。女家畜は間断なく妊娠しているように配慮し、孕んだ雌牛よりも大事にされた。タバコ園経営者達は黒人の女奴隷達に子供を生ませて、奴隷として売買したという。また、ジョージ・ワシントン<sup>5)</sup>は、バージニア・タバコ貴族の一員であり、広大なタバコ園を所有し、多くの黒人奴隷を使役していた。彼は、所有地内の黒人達の宿舎を訪問し風をひいたのが原因で死んだという。

#### 3.1.2.2 南北戦争の真因

前述したように、米合衆国建国の目的は、新世界機構・構造を構築するために使用する手段(組織・国家)として建国することであった。そのためには、米合衆国それ自体を新世界機構・構造

に合致するものに整備すると共に、米の構造を「米（軍需）産業株式会社」にする必要があった。しかるに、後述するように、国内に3つの社会構造が併存していたので、さし当たっては、北部による南部の統一によって独立後の米合衆国の指導権を確保（争奪）する必要があった。これが、南北戦争の真因であった。

その直接の契機が、リンカーンの奴隷解放であった。あたかもこれが南北戦争の真因かのようにされているが、これはあくまでもタテマエである。しかも、リンカーンの奴隷解放の真因は、南部の奴隷を解放して、安価な工業労働力（当時北部の白人工業労働者の賃上げの要求が激しくて経営者は対策に悩んでいたという）として北部の工業地帯で使用したいという工業経営者たちの要望にあったのである。

### 3.1.2.3 3つの社会構造

当時の米合衆国の3つの社会構造とは、以下のようなものであった。

当時の米合衆国は、おもに13州が中心となって構成されており、大別して、3つの社会（北部・中部・南部）に別れており、3種類の間人が居住していたのである。（まだ西部は未開拓であった。）各地域の特色は以下のものであった。

北部 ポストンを中心／寒くて農作物には不適で、必死で労働せねばならなかった／農・漁・商業や製鉄・造船・貿易業で産業を経営／欧の産業革命時代の移行 奴隷制度承認せず

中部 フィラデルフィアを中心／土地は豊かで、小麦・牧畜・商業が盛ん／欧の農村移行 奴隷制度 承認せず

南部 リッチモンド・アトランタを中心／大農園制 小作人 奴隷 タバコ・米・染料の藍／大地主 豊かで文化の香り高い生活 欧の貴族社会の移行 多数の貧しい白人奴隷制承認／南部の大タバコ園 経営の行き詰まり→綿 南部の大農園の発展 黒人奴隷の数の増大／南部 620万 南部 2000家族 320万の黒人奴隷 150万の貧乏白人 生活の辛さ

### 3.1.2.4 南北戦争

戦争そのものは、1861年4月12日16時30分に開始され、1865年4月の南部の総指揮官リー將軍の降伏をもって終了したのである。

戦争の最中の1863年の1月1日に、勝利への政治的手段として、奴隷解放宣言書が発布されたのである。

## 4. 米合衆国の東征政策としてのペリー来航

### 4.1 米合衆国の対世界行動のメカニズム

前述の2つの対内・国内作業を完了し、インディアンを殲滅しつつ、西進し、西岸・太平洋岸のカリフォルニアに到達し、米合衆国の領土が北米大陸の現在の米合衆国領に達した段階で対内作業は完了したのである。

以後、西欧諸国に遅れて海外侵略を本格的に始動し、植民地獲得作戦を遂行したのである。以後の米合衆国の対世界行動は、常に二重に動機づけられた行動となるのである。つまり、米合衆国の建国の使命・目的からの動機付けと米合衆国それ自体の国益からの動機付けによつての行動となったのである。何故ならば、米合衆国・米国人を動員して行動（つまり、米国人・米合衆国

の政治力・軍事力・経済力・国力を投入しての行動)するわけであるが、一般の米合衆国国民は、そして、タテマエとしての米合衆国の在り方は、米建国の真の使命とは無関係な存在であるから、米合衆国建国の真の使命からの行動という側面を隠蔽し、そして、米合衆国それ自体の国益を全面に打ち出して国益のみに基づいての行動であるとの擬態・姿勢が必要となるのである。だから、大統領の演技能力が必要となるのである。演技能力が欠如するとき、あるいは、脚本にない演技を演ずるとき彼は不要となるのである。単なる憶測での話ではない。事実でもって証明できることである。

今述べたようなメカニズムでの作業は、時間がかかるが、着実に失敗しにくいのである。

#### 4.2 東征作戦

鯨油を求めて捕鯨のために米国人は太平洋に進出した。やがて、太平洋を東進する東征作戦を開始した。そして、1900年ハワイ王国（750年頃にマルケサス諸島から、そして、13C頃にタヒチ島から移動したポリネシア人を原住民とするハワイ諸島は、1810年迄にカメハメハ王朝によって統一された。1893年に米国に強要され、リリウオカラ女王は退位させられ、ハワイ王国は崩壊した。）を強引に米国に併合した。（その意図は、米国の東進作戦の前進根拠地としてハワイ諸島を利用するためであった。）同年にミッドウェイ島も領土とした。

1878年にはサモア諸島の一部を半保護領とした。小笠原諸島を発見し、根拠地とした。

1901年にはスペインに戦争を仕掛けて米西戦争においてキューバを植民地とし、砂糖をはじめとする重要戦略物資を奪取した。そして、スペイン領であったフィリッピン諸島も領土とした。フィリピンの独立運動を弾圧し、アナギルドを処刑した。同年グアム島も領土とした。

ここに、米国本土－ハワイ－ミッドウェイ－ウェーク－グアム－フィリピンの太平洋横断ラインが完成した。

#### 4.3 ペリー来航 国際ユダヤの命令

このような背景と経緯で1853年にペリー提督に率いられた米艦隊が浦賀に来航したのである。ペリー来航は、世界経営層の指令と言われている。これまで述べてきたことから明らかなように、日本への来航の目的は、決して親善と通商を求めて来航したのではない。あくまでも、東征の一環としての来航なのである。西欧諸国、そして、米合衆国の日本以外の地域での行動をみればすぐわかることである。日本だけに親善と通商を求めてやって来るはずがない。

ペリー来航の前に

1803年7月に長崎来航し、通商要求

1837年6月にモリソン号が浦賀に来航、幕府の打ち払い令によって撃退

1846年5月にジェームズ・ビッドルが軍艦2隻で浦賀に来航通商要求したが、幕府は拒絶した

15代大統領フィルモアは、米東インド艦隊司令官のペリー（ユダヤ人）を遣日特使として派遣し、彼は、1852年にノーフォークを出撃し、大西洋を喜望峰－シンガポール－香港－上海－琉球－小笠原経由で、1853年6月に浦賀沖に来航したのである。

米合衆国にとって太平洋は内海であり、裏庭なのである。国境線を日本まで延長したいがために、来航したのである。日本は米合衆国の生命線なのである。1931年9月にわが関東軍は、「満蒙は、日本の生命線」のスローガンで満州事変を起こした。軍部の独断専行といわれているが日本人皆の悲願だったのである。日本の大陸への夢は破れたが、1853年に具体的行動で表現された米合衆

国の願いは、1945年8月15日に成就した。明治以降日本人の中にも「我太平洋の架け橋とならん」と言って米合衆国の国策に協力した人（五千円札に登場した）もいた。

彼以外にもあらゆる階層・職業（日本の戦争を指導した職業軍人を含んで）の無数の日本人が幕末期から1945年8月15日間での間に、米合衆国の国策に意識的・無意識的に協力したのである。敗戦以後今日まで、全く同じことが繰り返されたのである。経済構造改革の行方は日本が米合衆国の辺境の国境地区であり、中国へのミッドウェイになることに帰着する。産業の空洞化によって工業州として存在価値を喪失するので、中国への空路における航空機の緊急避難基地としての価値しか持ち得ないからである。

## 文 献

広瀬 隆『赤い楯』上・下，集英社，1991年

イザヤ・ベンダサン『日本人とユダヤ人』，角川書店，1971年

志貴 宏『物語世界史 9 リンカーンと南北戦争』，学習研究社，1983年



## The Purpose of Matthew Calbraith Perry's Navigation to Japan

Kiyoshi Horie and Seiichi Hayakawa

The purpose of this paper is to discuss the purpose of Perry's navigation to Japan.

It is concluded that the purpose of his Navigation is to make Japan colonized Country for the operation of controlling the Pacific Ocean by the order of the Word manager.

Key words : U.S.A., Indian,the Civil War, Perry